

ロマンさん一家の1日

↓漁師のロマンさん一家は、妻のタナさん、小学生の娘のレスビアちゃんの3人家族。ホンジュラスのガリフナの村、グアダルルーベに住む。土壁に土間をしてヤシの葉葺きの小さな家には、数年前から時間制で電気が引かれている。家のなかは土壁で、寝室とキッチン兼居間のふたつにわかれている。妻のタナさんは炊事洗濯、子育て、野良仕事と忙しい



ガリフナの歩み

年	できごと
1624	カリブ海の東端、アンチル諸島の島セントビンセントの近海を航行中の奴隷船が難破し、西アフリカから連れてこられた黒人たちが島に流れつき、先住民アラワク族とともに暮らしはじめる。以後、カリブ海で繰り返られていたヨーロッパ列強の覇権争いのなか、その支配を免れていたセントビンセントは、周辺の島から、逃げてきた黒人奴隷などが住みはじめ、徐々に「ガリフナ人」としての文化を形成していく
1635	セントビンセントはフランス統治下にはいる
1763	イギリス統治となる
1773	第1次カリブ戦争。ガリフナ人がイギリスに対し反乱を起こす
1779	イギリスと停戦協定を結ぶ。ガリフナの自治区設定
1795	第2次カリブ戦争。独立を求め、イギリスに対して決起。結局、敗北し、全ガリフナのセントビンセント島追放が決定
1797	4月11日。約2000人のガリフナを乗せた八隻のイギリス船が、ホンジュラス沖のロアタン島に到着。当時この島はイギリスの流刑の島として使われていた。イギリス人は、島に当面の食料、マニオウイモの苗木、農具、釣り具など、生存に必要な道具類とともにガリフナ人をおきざりにする
1821	中央アメリカ連邦（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ）、スペインから独立
1823	中央アメリカ連邦内戦。自治独立をめざすガリフナは、分裂派に加わるが、連邦派の虐殺にあい、グアテマラ、ベリーズへと分散逃亡し、定住する
1838	ホンジュラス独立
1902	アメリカの多国籍企業ユナイテッド・フルーツがホンジュラスに大規模バナナ・プランテーションを展開。以後、ホンジュラスはアメリカとの結びつきをふかめる。ガリフナ人の男のおおくがバナナ園で働くようになる
1980年ごろ	アメリカが軍事基地強化のみかえりとして、ホンジュラス国民のアメリカ入国移住の規制を緩和。そのなかで、ガリフナもニューヨークへ出稼ぎするようになる

ガリフナの衣食住

カリブ海を舞台とした、ヨーロッパ列強の植民地支配のなか、ガリフナ人としての自覚を形成してきた人びとの日常点描

とみた あきら
富田 晃
(写真家)

には深い敬虔の念をもち、死と死者の霊に関わる各種儀式がとてむたいせつにおこなわれる。ガリフナにとって死とはすべての終わりはなく、来世の始まりなのだ。死者たちの霊が住む来世と現世はつながっており、先祖たちは来世から現世の子孫たちを見守っているのだ。それら儀式には現世との別れの儀式ベロリオ、来世での復活を祝うプンタ、そして死者の霊と魂の交信をするドゥグがある。

グアダルルーベ村を歩く

ホンジュラス共和国は中央アメリカ地域の中南部に位置し、主要言語はスペイン語。面積は日本の三分の一程度。人口は約500万人。その大半はメステイソとよばれる、スペイン人と先住インディオとの混血である。そのほか、エルサルバドル国境沿いには、レンカ



この村の人びとはとても穏やかである。海の幸、山の幸に恵まれたこの村は食料はほぼ自給自足している。日々の生活は自然とともにあり、人びとは朝早くから働き、午睡のあとは娯楽をしながらのんびり過ごす。

村には男性と女性の仕立屋が一人ずついて村びとの衣服をつくる。男性の仕立屋は男性、女性の仕立屋は女性を担当する。女性たちはなかなかおしゃやれて、大きな柄の派手なワンピースを着ることがおおく、頭にはスカーフ

族、ニカラグア国境沿いにはミスキート族といった先住民族が住む。そして、カリブ海沿岸の村むらには、数奇な運命の末この地にやってきた黒人たち、ガリフナが暮らしている。ホンジュラスのカリブ海沿岸にあるグアダルルーベ村。典型的なガリフナの村だ。この村に着くには最寄りの町トウルヒーリヨから一日二つのバスに乗りガタゴト道を二時間、さらに海岸を三分ほど歩かなければならない。人口は約600人。村

現在ガリフナたちのおおくはキリスト教徒であり、クリスマスや各村ごとに開かれる聖人の日の祭りは、ガリフナの年中行事のなかでもっともたいせつなものだ。そしてこれらの信仰はアフリカ、カリブからもこんだ土着信仰とも一体化している。とくに先祖の霊

かれらは独自の言語ガリフナ語を話す。ガリフナ語とは、南アメリカのアラワク語系の言語を基本に、カリブ族の言語、バンツ語など西アフリカの諸部族の言語、そして英語、フランス語などおおくの言語が混ざったものだ。さらにスペイン語の影響を受けている。また独自の文字をもたなかったが、アルファベットのローマ字表記によりその発音を表記している。

一六二四年、一隻の奴隷船がカリブ海、ベネズエラ沖を航行中、嵐にあい沈没。九死に一生を得た黒人たちは、近くのセントビンセント島に泳ぎ着き、この島で暮らしはじめた。そして島の先住民と混ざりあいながら、しだいにガリフナ族として独自の文化、言語を身につけるようになった。その後、セントビンセント島に植民にやってきたイギリス人と衝突、ガリフナたちは、カリブ海地域におけるイギリスの敵対国フランスと組み、イギリスに対し長年にわたる戦いの末、一七九七年、五〇〇〇人ほどのすべてのガリフナは、遠く二九〇〇キロ離れた中央アメリカ、ホンジュラスに追放された。現在ではホンジュラスを中心にグアテマラ、ベリーズのカリブ海沿岸に約三〇万人のガリフナがいる。



↑(上)村の婦人たちは男が獲ってきた魚の内臓を裏庭で抜き、塩干しにする。それらは町に運ばれ、メスティソ(スペインと先住民の混血)が飲む復活祭のスープに使われる。この村にとって貴重な現金収入だ
 ↓(下)ロマンさんが昼前に漁から帰り、獲ってきた魚と、タナさんが山から掘ってきたマニオクイモの入ったココナツスープと、マニオクイモからつくるせんべい状のカッサベなどで家族そろっての昼食をとる



↑昼前にロマンさんたちを乗せた丸太船が村に帰ると、砂浜に村びとが集まり、そのまま村の魚市場となった。婦人たちがその日の食事のために魚を買っていく。しかし商品価値の高い魚は仲買人がさらにはかの町へ運んでいく



↑夜明け前、ロマンさんは丸木舟に乗り、海に出る。この村の漁業は地引き網がさかんで親戚、近所の仲間とチームをつくり共同で仕事をする。村から1時間ほど離れた海岸が漁域だ。この日、朝日が昇るころ海岸から網を引くと、体長30センチほどの魚が大きなたらい1杯分ほど獲れた



↑一家は村の集落からすこし離れた山中に、自給用のマニオクイモとバナナの畑をもっている。畑仕事は奥さんのタナさんの仕事だ。この日、タナさんは昼食のココナツ・スープに入れるマニオクイモを掘りに行った



ロマンさん一家の朝

←朝7時ごろ、レズビアちゃんは村の共同蛇口で朝の行水を浴びたあと、甘いコーヒーとココナツパンを食べながら、お母さんに髪を三つ編みにしてもら

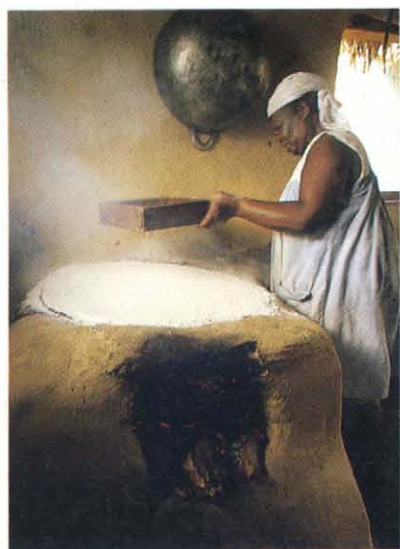


←村の小学校に通う娘のレズビアちゃんは3年生。算数が得意だ。しかし村には中学校がないため、小学校を卒業すると町の中学校で寄宿生活をするようになる

ロマンさん一家の昼

ある側の部屋の隅には薪を燃料とするかまどがつくられ、さらに椅子とテーブルが置かれ、ダイニングキッチン兼居間となる。もう一つは乾燥した草の葉をまとめてつくった敷物を寝具に使っていたが、いまはあまり使われていない。
 最近では夫の出稼ぎによる現金収入の増加で、いくつかの部屋をもつブロックづくりの家も

を巻いたり、日本の麦わら帽子のような形のヤシの葉の帽子をかぶる。それらはセントピセンセント島時代におけるフランス文化の影響によるものだ。男性はスラックスにYシャツやTシャツ姿がふつうだ。
 一族につき五、六人が一般的で、男性は平均二〇歳、女性は一八歳ぐらいで結婚する。とくにガリフナとして結婚の儀式があるわけではなく、ほかのホンジュラス人とおなじように、キリスト教カトリックのしきたりにのっとり、教会や市役所でおこなわれる。そして妻側の親の家の近くに家をたて、夫婦生活をはじめ、子どもは六、七人生むが、その半数は乳児期に死亡するため三、四人の子どものもつ家がおおい。
 家は土壁に土間、ヤシの葉葺きの小さな家がおおい。それはガリフナがやってくる前からの土地に住んでいる先住民たちのものとはほとんどおなじで、それをまねしたのである。
 家には出入口がふたつあり、海側を玄関とし、反対の山側を勝手口としている。なかは土壁が中央をふたつにわけ、入口の



↑マニオクイモの粉を一定量計り、大きな鉄板の上にひろげて焼いていく。そして表面をととのえるため、丁寧にマニオクイモの粉をふるいで追加する



↑毒性水分を抜かれたマニオクイモはヤシの葉で編んだふるいにかけられ、きめが整えられる

←数分もするとバナサバだったマニオクイモはせんべい状になる。まだまだあまりかたくならないうちに放射状に切り、裏返す



↑焼きあがったカッサバは、乾燥していて味がなくパリッとした歯ごたえだ。そのまま数ヶ月保存がきく。また湿らせて食べることもあり、それはしっとりとした食パンとていいる



↑バナナは種類がおおく量も豊富だ。日本でなじみのふつうのバナナや、台湾バナナとよばれるものはもちろん、煮たり焼いたり揚げたりして食べる調理用バナナも種類がおおい



↓ゆでたバナナを臼と杵でつき餅のようにする。これを各種材料と煮こんだココナツ・スープに加えると、マチュカという料理ができる。まるで日本の雑煮そっくりだ



↑(上)人の頭大のココナツの実、甘い果汁を豊富に含んでいる。果汁を抜き取ったココナツには白く甘い果肉がついて、それを擦り絞ってココナツ・ミルクをとり、各種スープのベースとする

↑(下)タマネギ、ピーマン、各種香辛料、さらに魚の肉を加えて煮こむ。なかなか手のこんだご馳走だ

一家は村の集落からすこし離れた山中に、自給用のマニオクイモとバナナの五〇坪ほどの畑をもっている。畑仕事はおもにタナさんの仕事だ。この日、タナさんは昼食のココナツ・スープに入れるマニオクイモを掘りに行った。

村の小学校に通う娘のレズビアちゃんは三年生。算数が得意だ。しかし村には中学校がないため、小学校を卒業すると町の中学校で寄宿生活をするようになる。

ロマンさんが昼前に漁から帰り、レズビアちゃんも二時ごろいったん小学校から家に帰る。そしてロマンさんが海から獲ってきた魚と、タナさんが山から掘ってきたマニオクイモのはいたココナツ・スープと、マニオクからつくったカッサバ(後述)で家族そろっての昼食をとる。

食事のあとは、タナさんは後片づけ、掃除や洗たく、ロマンさんは午睡をとる。それは男の仕事のほうか肉体的疲労がおおいかからず、そしてレズビアちゃんは学校にもどる。夕暮れどき、レズビアちゃんは学校からも



カッサバづくり



↑マニオクイモには、有毒成分を含むものと含まないものの2種類がある。有毒マニオクは青酸性的有毒成分を含むが、毒抜き処理をして、カッサバというせんべい状の主食をつくる

←カッサバづくりは女性たちの仕事。皮を剥いたマニオクイモは、エギとよばれる擦り板で擦られる。エギとは大きな板状の木材に、数百のとがった石を埋めこんだものだ

←(右・左)擦られたマニオクイモは、ルグマとよばれる巨大なへび状の網に入れられ、天井から吊るされる。そして15分ほど女性たちが重しに座り、毒性のある白い乳状の水分が抜かれる。

カッサバづくりは南アメリカに住む先住民らの方法とおなじだ。この点からみるとガリフナ族は、南アメリカからセントビンセント島に渡ってきた先住民の影響が大きいということが出来る



昼前にロマンさんたちを乗せた丸木舟が村に帰ると、砂浜に村びとが集まり、そのまま村の魚市場となった。婦人たちがその日の食事のために魚を買っていく。しかし商品価値の高い魚は、仲買人がさらにほかの町へ運んでいく。また奥さんのタナさんは夫が獲ってきた魚を家の裏庭で内臓を抜き、塩干しにする。それらは町に運ばれ、メステイソンたちが復活祭に飲むスープに使われる。タナさんは魚の塩干しの仕事のほか炊事、洗たく、子育て、野良仕事など忙しい。

この家でもニワトリを放し飼いにしている。だから村を歩くと、人の数とおなじくらいニワトリたちにあうことになる。ニワトリは卵と肉が食用にされる。また肉食用にブタを飼っている家もおおい。またイスやネコは飼い主は決まっているが、村の住人として自由に生きている。ガリフナたちはほかのホンジュラス人のように家畜としてウシやウマを飼ったりすることはあまりない。

ロマンさん一家の一日

ロマンさんは三六歳、グアダルベ村の漁師だ。一三年前、五歳年下のおなじ村に生まれた奥さんのタナさんと結婚。三人の子どもができたが、二人死んでしまっていて、現在は九歳の娘レズビアちゃんとの三人家族だ。

その日も、夫のロマンさんは村の漁師仲間と海に出た。この村の漁業は地引き網が盛んである。ロマンさんは、親戚や隣り近所の男たち八人でチームをつくって漁にでる。舟はロマンさんのおじさんのものだ。村から一時間ほど離れた海岸が漁場だ。海原に網を打ち、朝日がのぼるころ海岸から網が引かれる。この日は体長三〇センチほどの魚が、大きなたらい一杯分の漁獲があった。



ベリーズ上陸の日

↑陸上では街じゅうのガリフナたちが待ち受けている。太鼓ガラオンがたたきだす熱いリズムとともに人びとは歌い踊る

↑上陸が再現される。海原から2隻のカヌーが太鼓の音を響かせながらやってくる。男たちは手に太鼓を、女たちはバナナやマニオクイモの苗をもっている

→祭りの日、夜明けとともに人びとは街の中心を流れる川スタン・クリークとカリブ海がてら河口に集まる。そこで1832年のガリフナたちのベリーズ上陸を再現するの



ベリーズ
ガリフナ上陸の日

ベリーズとは中央アメリカでもっともあたらしく、そして小さな国だ。一九八一年にイギリスから独立したこの国は、中央アメリカのカリブ海沿岸にあり、面積は日本の六パーセントに過ぎない。北にはメキシコのユカタン半島、西にはグアテマラと国境をもち、ホンジュラス湾をさみホンジュラスと面する。人口はわずか二〇万人弱、ほとんどがアフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちとイギリス系白人だ。そして山中にはマヤ系インディオ、さらにカリブ海沿岸のダンリガ市といくつかの村には約一万人のガリフナが住む。ベリーズで一月一日は国の祝祭日。一八三二年のこの日、ホンジュラスの内戦から逃れたガリフナたち四〇人をのせた二隻のカヌーが、ベリーズのダンリガ(ベリーズシティから南へ約六〇キロ)に上陸したことを記念する日だ。

当時ホンジュラスを支配する中央アメリカ連邦(現在のグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ)は、利害が対立する各地域の思惑のため、分裂の危機をはらんでいた。そんななか、連邦最後の大統領となる、ホンジュラス出身の軍人フランシスコ・モラサンは連邦を維持すべく、分裂派勢力と戦いをくり返すようになった。そこでガリフナたちはみずからの独立を勝ち取るうと分裂側に加わり、モラサン軍と小競り合いを繰り返した。そしてガリフナたちのなかには連邦派勢力の弱いグアテマラ、ベリーズのカリブ海沿岸へと逃げていくものたちがいたのだ。

そのころ、ベリーズにはイギリスが侵略の手を伸ばし始めていた。その後、ベリーズはイギリスの植民地となり、イギリス系白人が多数を占めるベリーズ社会のなかで、ガリフナは邪魔者の存在の少数部族として、孤立させられてきた。つまり、セントビンセント島に

おいてイギリスは、長い苦闘の末やっとおはるかかなたのホンジュラスへガリフナを追放したはずなのに、ジャマイカからベリーズへと侵略を進めると、そこにはまたガリフナがいたからだ。それでセントビンセント島ではガリフナを奴隷化しようとしたイギリスも、今度は戦うことも奴隷化することも諦め、これらの居住区を隔離閉鎖することにしたのだ。一九三三年、ホンジュラスから、あるガリフナの家族がダンリガに移住してきた。のちにガリフナ上陸の日をはじめ数々のガリフナ社会のための改革運動をすすめることになる、トマス・ピセント・ラモスとその家族であった。ラモスは学校で教鞭をとりながらガリフナたちのリーダーとして、病氣や死亡したとき助けあう保険組織や社会開発のための共同資金運営など、数々の共同組合をつくりガリフナの連帯、社会意識を高めていった。そしてガリフナみずからが歴史と文化を再認識し、隔離されてきたガリフナ社会をベリーズ社会に認知させ認識を高めようと、一月一日日をガリフナの日とし数々のイベントを企画したのだ。



↑(上)上陸がすむと太鼓奏者たちを先頭に町の教会まで行進する。女性たちはかごを頭に載せカッサベや果物、ココナツパンなどの供物を運ぶ



↑(下)教会ではミサ・ガリフナが開かれる。まず代表のガリフナ指導者がガリフナの歴史を語り、誇りを訴える。そして礼拝がはじまる。次々に歌われる聖歌はガリフナ語で、太鼓ガラオンの伴奏で歌われる

この祭りを始めたトマス・ピセント・ラモスは、ガリフナ上陸の日をはじめ数々のガリフナ社会の改革運動をおこなった。現在、ベリーズではガリフナの父としてその名前を知らないものはいない

どり、近所のお友だちといっしょに家の外に椅子を並べ、読み書きや算数の宿題をする。ロマンさんも娘に教わりながら読み書き、算数の勉強をする。宿題が終わるとみんな縄跳びやけんけん、ビー玉をして遊ぶ。ロマンさんとタナさんは夕焼けのなか、村の仲間と語り、ドミノやトランプ、ビンゴなどの娯楽をして一日でもっとも楽しい時間を過ごす。

ガリフナの胃袋をみたく

ガリフナたちの食べものは、高カロリーの。これらの食事の原材料はバナナ、ココナツ、マニオクイモ、魚、鶏肉、豚肉などだ。ほとんどは自給自足でまかなわれる。それらは多量のヤシの油で調理され、そのせいか女性た

ちは思春期を過ぎるとすばらしくりっぱな体格になる(なぜか男性は太らない)。バナナは種類がおおく量も豊富だ。日本ではなじみのふつうのバナナや、台湾バナナとよばれるものももちろん、煮たり焼いたり揚げたりしてたべる調理用バナナも種類がおおい。それら調理用バナナはイモのような味がする。そしてこれら各種バナナを素材としてつくられる料理の種類も豊富だ。

まずタハダという、調理用バナナをうすくきって揚げたもの。これにはいくつもの種類があり、バナナの種類によってポテトチップのようにサクサクしたものから、粘りけがありバナナが半分溶けたようなものまである。そのほかバナナを白と杵てついたマチュカと

いう料理もある。それはココナツ・ミルクのスープに魚とともに混ぜられ、ちょうど日本の餅や雑煮にそっくりだ。これはなかなか手きなどにつくられる。ココヤシはじつに有用な植物だ。ガリフナの村全体は高いココヤシの木で風雨をすく熱の太陽から守られている。家もまた屋根はココヤシ葺きで、海岸のココヤシの木陰では村びとたちが語り、ドミノやトランプに興

じ、そして幹に吊るしたハンモックで午睡をとる。村のココヤシはそれぞれ所有者が決まっており、各家ごとに五〜六本のココヤシを有している。ココヤシの木には年じゅうココナツが実っている。

ココナツもまたガリフナにとって欠かせない栄養源だ。人の頭大のココナツのなかには甘い果汁を豊富に含んでいて、それが人びとの喉の乾きを癒し、その糖分が仕事に活力を与える。果汁を抜き取ったココナツには白く甘い果肉がついている。それを果物として生で食べることもあるが、このままでは少し味が粗野すぎる。それで果肉を絞ってココナツ・ミルクをとり、数々の調理料とまぜられスープとなる。また絞り粕も菓子やパンの材料となる。

マニオクの木は高さ二メートルほどになり、地下にできる長大な根茎が食用になる。南アメリカ原産の植物で、ふるくから食用として中央・南アメリカの先住民たちに知られてい

ロマンさん一家の午後

た。そして新大陸発見後、ガリフナたちがきた旅とは逆に新大陸からアフリカへとひろがっていったのだ。マニオクは一年じゅう栽培され収穫され、挿し木により増殖をし、一〇カ月から一年後に収穫をする。一度掘り起こしたマニオクイモは腐りやすいので、畑が貯蔵庫の役割をし、必要なときに掘りだされる。

マニオクイモには有害成分を含むものと含まないものの二種類がある。無毒マニオクはサツマイモのような味がし、ゆでたりして食べる。ココナツ・スーブの具としてもたいせつだ。もうひとつの有毒マニオクにはイモに強い青酸性の有害成分を含んでいる。これを食用とするには毒抜き処理をしてカッサベというせんべい状の主食をつくる。

カッサベをつくりは女性たちの仕事。村には数軒、カッサベづくりをする家があり、そのための道具やかまどをもっている。家族、隣り近所の仲間たちで四、五人がグループになり、数週間に一回、村じゅうのカッサベをつくる。皮を剥いだマニオクイモは、エギとよばれる擦り板で擦られる。エギとは大きなまな板の木の材に数百のこがった石を埋めこんだものだ。このとき女性たちは、マニオクイモを擦る腰の屈伸にあわせガリフナ民謡の労働歌をうたう。擦られたマニオクイモは、ルグマとよばれる巨大なヘビ状の網に入れられ、天井から吊るされる。一五分ほど重し代わりの女性たちが網を下へひっぱり、白い乳液状の水分が抜かれる。これには強い毒性がある。

カッサベをつくるのは女性たちの仕事。村には数軒、カッサベづくりをする家があり、そのための道具やかまどをもっている。家族、隣り近所の仲間たちで四、五人がグループになり、数週間に一回、村じゅうのカッサベをつくる。皮を剥いだマニオクイモは、エギとよばれる擦り板で擦られる。エギとは大きなまな板の木の材に数百のこがった石を埋めこんだものだ。このとき女性たちは、マニオクイモを擦る腰の屈伸にあわせガリフナ民謡の労働歌をうたう。擦られたマニオクイモは、ルグマとよばれる巨大なヘビ状の網に入れられ、天井から吊るされる。一五分ほど重し代わりの女性たちが網を下へひっぱり、白い乳液状の水分が抜かれる。これには強い毒性がある。



夕暮時、レズビアちゃんは家の外に椅子を並べて読み書きや算数の宿題をする。ロマンさんも娘に教わりながら勉強をする。宿題が終わると夕焼けのなか、村の仲間と語りながらいながら1日でもっとも楽しい時間を過ごす

都市、外国への憧れ

ルグマからだされた棒状マニオクイモは乾燥のため一晩放置される。翌日、棒状のマニオクイモは手で砕かれ、さらにヤシの葉で編んだふるいにかけてられる。ガラロという木板の上に、パサパサしたマニオクイモの粉を一定量すくいと、薪で熱した大きな鉄板の上にひろげ、さらに表面をととのえるため、丁寧にマニオクイモの粉をふるいで追加する。数分もするとパサパサだったマニオクイモはせんべい状になる。またあまりかたくならないうちに放射状に切り裏返す。焼きあがったカッサベは乾燥していて味がなく、パリっとした歯ごたえだ。そのまま数カ月保存がきく。また湿らせて食べることもあり、それはしっとりとして、食パンにている。

若者たちはニューヨークの黒人たちのラフでカジュアルなライフスタイルをとりいれているが、同時にガリフナの伝統を引き継いでいる。音楽ではガリフナの伝統音楽とニューヨークの最新音楽を融合させ、斬新なサウンドをつくりあげ、プロとして活躍しているものたちもいる。それらの曲はニューヨークの黒人社会をはじめ世界に発信されており、母国ホンジュラスのガリフナたちのあいだにも逆輸入され、人気をよんでいる。